

英語科目の好成績をもたらすもの：ぎゅっとeの実践を通して

鈴木，右文
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/1786388>

出版情報：英語英文学論叢．62，pp. 39-49，2012-03-27．九州大学英語英文学研究会
バージョン：
権利関係：

英語科目の好成績をもたらすもの

— ぎゅっと e の実践を通して —

鈴木 右文

1 本稿の目的

本稿の目的は、九州大学で筆者が担当したウェブ上の自律学習による英語科目で優良な成績を収めることが、どのような要因と関係しているか（いないか）について考察し、そのようなタイプでの英語授業での指導に活かすヒントを得ることである。

2 分析対象となるクラス

九州大学で筆者は2011年度前期に2年生向けの英語ⅢBを担当した。この科目は、「ぎゅっと e」というウェブ教材を使用した自律学習を内容とするもので、コンピュータ端末上でリーディング、リスニング、グラマーの3つの問題群を解き、わからなかった問題を復習していくスタイルをとる¹。いずれの問題群も、コンピュータを相手にドリルを積み上げていく形式であり、個人のペースで進められる自律学習が適している。300名弱という規模の法学部・工学部エネルギー学科の混合のクラスで、木曜日の第1時限に実施された。

3 受講者と成績

授業の対象となる学生数は、本来法学部197名・工学部エネルギー学科100名の計297名である²。しかし、単位認定等で受講の必要がない者

-
- 1 「ぎゅっと e」は、広島市立大学の青木信之教授と渡辺智恵准教授により開発されたコンテンツに、広島市内の業者が開発したLMS（Learning Management System：学習管理システム）を組み合わせたもので、国内の複数の大学で採用されており、さまざまなコースが用意されているが、九州大学ではリーディング、リスニング、グラマーの3コースを採用している。詳細は<http://gyuto-e.jp>を参照。
 - 2 転学科その他特別な事情で3名が追加となっているが、法学部と工学部エネルギー学科の同学年生に分析対象を絞るため、これらの3名は分析の対象からはずしている。

がそれぞれの学部で2名ずついるため、受講すべき人数は、法学部195名・工学部エネルギー学科98名の、あわせて293名である。この授業での成績評価は、基本的に教材の学習状況（出席状況を含む）、3回の中間試験、定期試験によって成り立っているが、定期試験を受験しなかった者が、法学部で6名・工学部エネルギー学科で15名いた（受講の必要がない者は除く）ため、途中で履修を中止せずに最後まで受講し定期試験を受けたのは、法学部で189名・工学部エネルギー学科で83名の、合計272名である。

定期試験を受験しなかった者の理由としては、不明の者が法学部で2名・工学部エネルギー学科で1名いるが、残りの法学部4名・工学部エネルギー学科14名は、授業で課した問題数を期限までに学習することができなかったことにより、単位認定ができなくなったものである。3回の中間試験ごとに、それぞれ試験範囲が定められているが、自宅のコンピュータ端末が中間試験直前に故障するなど、突発的事態も考えられ、範囲の約8割を「ノルマ」と称して設定し、中間試験実施の前日までにその「ノルマ」の問題数を終了することを単位認定の条件にしている。そのような制限を設けない場合、残念ながら学習量が極めて少ない受講者が続出することが経験上わかっている。2割の余裕をみた「ノルマ」でも達成できなかった受講者は、教材費を支払っている限り学期末まで教材を使用する権利を有するものの、残念ながら単位は認定されない。

また、定期試験を受験した272名についての、この授業での最終成績の分布は表1のようになっている。

表1 授業の最終成績の分布

		A (90~)	B (80~89)	C (70~79)	D (60~69)	F (~59)
法学部	189	33 (17.5%)	68 (36.0%)	50 (26.5%)	31 (16.4%)	7 (3.7%)
工学部エネルギー学科	83	5 (6.0%)	18 (21.7%)	25 (30.1%)	23 (27.7%)	12 (14.5%)

4 成績算定基準

この授業では、学習実績と試験の成績を主な手がかりとして成績を算定している。中間試験が15点満点で3回、定期試験が40点、学習状況が15点で合計100点となっている。まず定期試験は、「ぎゅっとe」のリーディングで扱われた英文を対象に、独自の設問を付して紙ベースで実施

される。中間試験は、リーディング、リスニング、グラマーという3つのメニューのいずれから出題され、教室のコンピュータ端末上で受験する。

学習状況には、学習安定度、問題消化率、学習正常度、出席状況という4つのデータが関係してくる。学習安定度については、3つのメニューを交互に学習し全体として同時進行させるようにと指導しているのだが、中間試験の直前になってまとめて大量の問題を学習していたり、ある週は消化した問題がリスニングばかりといった、目立った片寄りがある場合に評価が低くなる。問題消化率では、ノルマ通過後試験範囲までどの程度学習を積み上げているかを評価し、試験範囲をしっかりと終わらせずにノルマぎりぎりしか学習していないような場合は減点になる。学習正常度では、ありえない速度で問題を解いたことを示すデータが目立つなど、不正常的な学習行動をとっている場合に評価が低くなる。出席状況については、学習内容が自律学習に向いていて本来は教室に集まる意義が薄いかもしれないが、現行の制度なので、遅刻欠席の回数をきちんと成績に反映させる。また、教室に集まってもらうのは、受講者に指導者の存在を意識してもらうためでもある。いずれも極端な場合には、学習状況に割与えられた15点が危うくなるだけでなく、それを越えて減点が生じ、単位認定がなされないこともあり得る。

5 中間試験・定期試験と平常学習の関係

平常学習にどれだけきちんと取り組んでいるかを表す指標として、学習安定度、問題消化率、学習正常度を成績算出を目的として調べることになるのだが、本節では、その状況と、中間試験・定期試験の結果との関係について検討する。

学習安定度、問題消化率、学習正常度で目立った問題があれば減点の対象になるが、中間試験・定期試験について、減点があった受講者の平均点と受講者全員（定期試験まで受験した者）の平均点との関係は表2のようになった。

なお、平常学習と中間試験・定期試験との関係の方を取り上げ、平常学習と最終成績との比較を見ることにしなかったのは、平常学習の不良をもとに減点した場合、最終成績に影響があるからである。

表2から言えることは2つあるように思われる。まず、問題消化率と

表2 平常学習と中間試験・定期試験の平均点との関係

		法 学 部		工学部エネルギー学科	
		減点対象者	全 員	減点対象者	全 員
学習安定度	中間試験	35.6 (17人)	36.1	34.1 (9人)	34.1
	定期試験	30.4 (17人)	30.4	26.8 (9人)	27.8
問題消化率	中間試験	31.9 (23人)	36.1	32.6 (12人)	34.1
	定期試験	27.4 (23人)	30.4	26.2 (12人)	27.8
学習正常度	中間試験	32.4 (9人)	36.1	31.4 (6人)	34.1
	定期試験	27.0 (9人)	30.4	26.2 (6人)	27.8

* 中間試験は3回分合計で45点満点、定期試験は40点満点

学習正常度については、法学部でも工学部エネルギー学科でも、中間試験と定期試験の両方において、減点対象者の平均点が全受講者（定期試験を受験した者に限る）の平均よりも明らかに低いと言える。ここから導き出せるのは、受講者が最低限の問題消化で済ませて与えられた問題をすべて全うしようとししない場合、もしくは受講者がぞんざいにしか問題に取り組んでいない場合、試験でよい結果が出ず、従って授業で好成績をおさめられないということである。逆に言えば、好成績をおさめさせるためには、与えられた問題をすべてこなし、ひとつひとつの問題にしっかり取り組むように指導する必要があるということである。

もうひとつ言えることは、週ごとの消化問題数に大きなばらつきがあって学習安定度に問題があっても、減点対象者の平均点は全受講者のそれと大差がないということである。その理由を想像するに、全問消化を面倒臭がる怠惰さがあったり、いい加減な取り組みをしたりする受講者は、問題をきちんとこなしていない可能性があるものの、週ごとの消化問題数にばらつきがあっても、それは「個人的なペース配分によるものであって、ひとつひとつの問題をきちんとこなしてはいる」かもしれないということがある。

こうした考察の結果、授業においては、与えられた範囲の問題をきちんとすべてこなしているかどうか、ひとつひとつの問題に十分な時間をかけて取り組んでいるかどうかをモニタすることが肝要であり、週ごとの消化問題数のばらつきについては無用に神経をとがらせることは必ずしも必要ではない、ということが言えるように思われる。

6 中間試験・定期試験と出席状況との関係

受講者の出席状況と中間試験・定期試験との関係は表3のようにまとめることができる。欠席回数がゼロの受講者と、4回以上の受講者に分けた。4回という数値を選んだのは、出席回数が全体（15回）の7割を割り込むことを基準としてみたからであるが、これは、4月から7月という授業期間において、月に1回休むペースである。

表3 欠席回数と中間試験・定期試験の平均点との関係

	法 学 部			工学部エネルギー学科		
	0 回 (78人)	全員 (189人)	4 回以上 (10人)	0 回 (24人)	全員 (83人)	4 回以上 (11人)
中間試験	38.8	36.1	29.9	36.2	34.1	32.8
定期試験	31.4	30.4	28.4	28.3	27.8	26.1

表3から言えることは、全体として出席状況のよい受講者ほど成績がよいということである。法学部であっても工学部エネルギー学科であっても、欠席の全くない受講者の平均点は、全受講者の平均点よりも高く、4回以上欠席した受講者の平均点は、全受講者の平均点よりも低い。これだけきれいに数値が並べば、出席状況がよい受講者こそ成績が良いと結論づけるのは妥当であろう。ということは、授業の中で、できる限り欠席せず、出席を重ねるように指導することが大切だということである。出席しなければその分自宅等授業外で学習時間を確保しているかという、決してそのような印象はなく、出席すればこそ学習が進められるという現実がある。実際、祝日等で授業のなかった週の学習時間は明らかに少なくなる。

この授業は、受講者個人のペースで進めることのできる自律学習によるものなので、極端な話をすると、授業に出て来なくても、自宅その他の端末で授業時間以外に学習を重ねれば、学習はきちんと進めることができる。しかしこの授業では、他の授業と全く同じように、出席状況が成績判定に影響を与える。この状況でしっかりと出席することのできるまめな受講者は、良好な学習と成績を達成することができる、ということなのではないだろうか。

7 最終成績と TOEFL-ITP との関係

九州大学の1年生は原則として全員、入学後の6月頃の土曜日に、一斉に TOEFL-ITP を受験することになっている（費用は大学側の負担）。本稿で扱っている英語ⅢBの受講者は2年生であるが、1年生の時に受験した TOEFL-ITP のスコアと、英語ⅢBでの最終成績との関係を示したのが表4である。

表4 授業の最終成績と TOEFL-ITP との関係³

	全体*	A	B	C	D	F*
法学部	471.9 189人	483 33人	477 68人	465 50人	465 31人	439 7人
工学部 エネルギー学科	451.1 83人	469 5人	459 18人	456 25人	434 23人	444 12人

*ここでは「F」は最後まで受講し定期試験を受験した者に限っているが、「全体」には途中で受講放棄した者も含まれている。

表4から言えることは、英語ⅢBの最終成績の分布と TOEFL-ITP のスコアの分布とは、ほぼ似通っているということである。

これは当然と言えよう。TOEFL-ITP はリーディングとリスニングの試験であり、英語ⅢBの教材であるぎゅっとeもリーディングとリスニングと文法を内容としているため、同様の分布になるのは自然である。しかしよく考えてみると、受験時点での実力を測定する試験である TOEFL-ITP と、4カ月にわたって学習した結果としての最終成績の分布が似通っているということは興味深い。これは、本来持っている実力が、時間をかけて達成する学習の結果にも反映されるということを意味しているのではないだろうか。そうだとすると、授業における受講者へのアドバイスとしては、虎の巻的な点数稼ぎではなく、実力をつけるような教材への取り組み方をせよ、ということになると考えられる。そし

3 数値に小数点が入っていないところがあるのは、筆者が誤って小数点以下を四捨五入しているからであるが、全体の論旨にはあまり影響を与えないため、そのままにしてある。また、TOEFL-ITPを受験した者の範囲と受講者とはびたりとは一致せず、受験はしなかったが受講はしているという者もわずかながらいるのだが（A-Dの各成績についてせいぜい1-3名）、全体の数値に大きな影響を与えないので、多少のずれは無視してデータを比較している。

てそのことは、第5節、第6節にあるように、出席もきちんとし、ぞんざいな学習をしない、ということにつながっていくものと思われる。

なお、法学部のCとDが同じ数値になっていることと、工学部エネルギー学科のFの数値がDの数値よりも高いのが変則的である。これらについては、特段の説明は思いつかないが、全体としての傾向を打ち消すようなデータではないと考える。

また、授業の最終成績の平均点は法学部が78.1であり、工学部エネルギー学科は70.9であった。この結果は、TOEFL-ITPの平均点が法学部で471.9であり、工学部エネルギー学科で451.1であったことと符合する。ここでも、受講者全体として、TOEFL-ITPの成績がよいと英語ⅢBの成績もよいと言える。

8 英語に対する姿勢（アンケート）と最終成績

定期試験の際に、英語に取り組む姿勢についてのアンケート調査を実施した（従って記名式のアンケートであったと言える）。その結果が表5である。それぞれの項目について、「よくあてはまる」を3点、「ややあてはまる」を2点、「あまりあてはまらない」を1点、「全くあてはまらない」を0点として集計した。これらの項目のうち、「センター試験は英語で稼いだ」「2次試験は英語で稼いだ」の2つは英語能力を示すもので、それ以外の項目が英語学習に対する姿勢を示すものである。

表5の質問は、4つのカテゴリーに分かれる。「英語が得意である」「英語が好きである」は英語に関する自己分析であり、「センター試験は英語で稼いだ」「2次試験は英語で稼いだ」は英語能力に関する客観分析であり、「高学年になっても英語を続ける」「授業以外で英語学習をしている」は学習意欲に関するものであり、「高学年で英語力があると有利」「就職に英語が必要」は将来における英語の必要性についての認識に関するものである。以下、まず法学部と工学部エネルギー学科のそれぞれについて、授業の成績のグレードと各項目の回答の数値の大小の関係について考察し、そのあと、数値の大小の学部間比較を行う。

法学部に関しては、成績のグレードと回答の数値がきれいに一致するのは「英語が得意」しかないが、「英語が好き」「センター試験は英語で稼いだ」「高学年になっても英語を続ける」「授業以外で英語学習をしている」においては成績がFの受講者だけが例外となっているので、概

表5 英語に対する姿勢と最終成績との関係

	全体*	A	B	C	D	F*
英語が得意である	法学部	1.70	1.47	1.18	1.10	0.86
	工学部エネルギー学科	1.80	1.12	1.16	1.08	1.00
英語が好きである	法学部	2.03	1.72	1.43	1.35	1.43
	工学部エネルギー学科	1.40	1.65	1.08	1.29	1.09
センター試験は英語で稼いだ	法学部	2.21	2.04	1.63	1.58	0.71
	工学部エネルギー学科	1.80	1.29	1.48	1.63	1.18
2次試験は英語で稼いだ	法学部	1.97	2.21	1.90	1.52	2.00
	工学部エネルギー学科	2.00	1.82	1.72	1.75	1.36
高学年になっても英語を続ける	法学部	2.12	1.82	1.71	1.45	1.71
	工学部エネルギー学科	1.60	1.88	1.68	1.88	1.55
授業以外で英語学習をしている	法学部	1.27	1.21	0.96	0.87	1.14
	工学部エネルギー学科	0.60	1.00	0.56	0.79	0.27
高学年で英語力があると有利	法学部	2.30	2.22	2.33	1.84	2.29
	工学部エネルギー学科	2.60	2.59	2.40	2.38	2.09
就職に英語が必要	法学部	1.97	1.71	1.86	1.48	1.43
	工学部エネルギー学科	1.80	2.06	1.84	1.96	1.91

*Fは定期試験を受験した者に限っている。定期試験を受験していなければアンケートの回答が不可能だからである。

ね一致しているとみることができる。残る「2次試験は英語で稼いだ」「就職に英語が必要」のうち、前者はまずまず一致の傾向を見せないでもなく、後者では成績Cだけが例外となっている。従って法学部の場合は、質問項目にあてはまる度合と成績の高低が概ね一致の傾向を示すと言ってよいように思われる。そうだとすると、英語に関する自己分析も、英語能力に関する客観分析も、学習意欲も、将来における英語の必要性に関する認識についても、レベルの高い回答をした受講者ほど、英語ⅢBの成績も高い傾向にあるということになる。授業においては、受講者に対し、将来の英語の必要性について十分認識させ、また英語学習に対する意欲を高めさせ、自分に対する英語に関係した評価を高められるような学習を実践するように指導していくことが大切であるということになるであろう。

もし分析の対象とする受講者が法学部の学生だけであつたら、以上のような結論を得て終わるところであるが、もうひとつの工学部エネルギー学科を分析すると、事態がやや変わってくる。工学部エネルギー学科では、自己分析と英語能力については、法学部ほどではないにしろ、

質問項目にあてはまる割合と成績の高低に平行性がかろうじて認められるのに対し、学習意欲と将来の必要性に関しては、平行性が感じられない、という結果になっている。英語に関する自己分析の「英語が得意である」と「英語が好きである」では、前者において成績 C の受講者だけが例外となり、後者では全体として見ればかろうじて平行性的なものが見てとれる。英語能力に関する客観分析の「センター試験は英語で稼いだ」「2次試験は英語で稼いだ」では、前者で全体としてかろうじて平行性的なものが見てとれ、後者では成績 D のみが例外となる。これらに対し、学習意欲の「高学年になっても英語を続ける」「授業以外で英語学習をしている」では、ほぼばらばらな結果であると言ってよく、将来における英語の必要性についての認識に関する「高学年で英語力があると有利」「就職に英語が必要」では、前者ではきれいな符合が見られるものの各成績グレードでの数値が近似しており、後者ではほぼばらばらな結果である。

これらの法学部と工学部エネルギー学科との結果の相違は、主に学習意欲と将来における英語の必要性のところにあるのだが、法学部の受講者に比べ、工学部エネルギー学科の受講者は、将来における英語の必要性に関して全体としては回答の数値が高いため、英語学習に対する意識が高いのではないと思われる。その理由は、法学部では外形的に英語学習が必要であるという明らかな要因がないのに対し、工学部では日本技術者教育認定機構による Jabee（日本技術者教育認定制度）があることによるのではないと思われる。Jabee とは、高等教育機関で行われる技術教育が満足のいくレベルにあるかどうかを審査する制度であり、学部教員団が学部生に対して英語学習に力を入れるように指導しているようである。同機構の定める大学院修士課程の日本技術者教育認定基準の個別基準の学士・修士課程における各分野での勘案事項の中に、英語コミュニケーション能力を基準としている部分がある。具体的には、技術系の様々な分野の学士・修士課程についての評価勘案事項において、「英語等の外国語を用いて、情報や意見をやりとりするための能力」(1)(2)(f)への言及がなされている。

また、表5の項目で、学部間の差が目立つのは、「英語が好きである」「センター試験では英語で稼いだ」「授業以外で英語学習をしている」の3つであり、いずれも法学部の受講者の方が数値が高い。好き嫌いの問

題は何ともコメントのしようがないが、「授業以外で英語学習をしている」の回答値が工学部エネルギー学科で低いのは、一般に理系のカリキュラムが文系に比較すると密度が高く、余分な時間を確保しにくいからではないだろうか。また、「センター試験は英語で稼いだ」については、TOEFL-ITPの数値を見れば、法学部の受講者の方が回答の数値が高いのは自然だと言える⁴。

本節の考察の結果として、好成績を受講者におさめてもらうために授業において指導すべき内容は、至極当然なことではあるが、授業以外に英語学習の機会を持ち、高学年になっても学習を続け、自分のこれからのキャリアにとって英語が有益だという認識を持つようにすることである。

9 終わりに

本稿では、平成23年度前期に300名弱の規模で実施された、リーディング、リスニング、文法の問題演習を内容とした自律学習による英語ⅢBという科目の受講者より得られた学習データ、成績、アンケート結果、およびそれらの受講者のTOEFL-ITPの成績に基づいて、この科目の成績が良好なのはどのような受講者であるかを割り出し、平素の授業における指導内容を考察した。本稿がこの種の授業科目の運営を担当する側にとって何らかの参考になっていれば幸いである。

4 この場合むしろ検討に値するのは、「2次試験は英語で稼いだ」になると両学部
の回答の数値の差がさほどないということであるが、特に思いつく説明はない。